



◇はじめに

巻頭言

所長 谷合 弘子

中央療育センターの運営に日頃よりご理解とご協力を賜り、関係各所の皆様には心より感謝申し上げます。

第2号では、昨年度開催しました「Be研修」の「運動が苦手なお子さんの理解と支援」について、さらにすぎのご学園のスタッフ（言語聴覚士、保育士、児童指導員）による難聴のお子さんへの発達支援の実際をご紹介します。「Be研修」の“Be”は、英語の「be（～として存在する、（人が）いる、（物が）ある）」に由来しています。発達相談に訪れるお子さんたちには、しばしば「Do（～をする）」の部分でうまくいかないことがあります。当センターのBe研修は、私がセンターに就任する前から、「お子さんの存在そのものを大切にする」という理念のもと運営されてきました。

発達支援においては、お子さん一人ひとりが持っている能力や機能を最大限に活かすことが大切です。そのためには、国家資格を有する理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などの専門職が、お子さんの運動やコミュニケーションの発達状態を評価し、主治医と治療計画を立て、支援を考えていくことが重要です。特に、難聴のあるお子さんに対する発達支援は、当センターが市内の中核的な施設となっており、診療所では外来リハビリテーションを、すぎのご学園（児童発達支援センター）では通園型の療育を行っています。

「できないこと」を「できるようにする」ことが療育の目標だと考えがちです。しかし、実際に発達支援に携わる中では「やりたくなる」きっかけを見つけることが大切です。お子さんが持つ能力や機能が十分に発揮されるよう、お子さん自身やそのご家族が「やりたい」と思えるような支援を提供することが、私たちの目指す療育の在り方です。

最後に、中央療育センターだより第2号をお送りするにあたり、皆さまからのご意見やご感想をお寄せいただければ幸いです。



◇令和5年度 第2回 Be研修報告

みどり学園の伊藤園長は、「モノ」より「ヒト」に関わりながら、障害がある人たちの役に立つ仕事をしようとエンジニアから理学療法士に転身し名古屋市に入庁。これまで、理学療法士として、わかくさ学園、西部地域療育センター、中央療育センターに勤められています。

PTの目から見た運動が苦手な子どもの理解と支援

みどり学園園長 伊藤 亜木（理学療法士）

私は理学療法士になってからの20年間、沢山の子どもたちの運動発達の支援に関わってきました。入職当初は理学療法の対象のほとんどは脳性麻痺などの運動障害のある子どもやダウン症などの運動発達に遅れのある子どもでした。麻痺のない子どもの多くは、苦手な運動を促していくとその子のペースで成長していき、独歩や日常生活の様々な動きを獲得すると理学療法は終了となります。

ある時、理学療法で関わった子どもの中に、「歩いたり走ったりはできるようになったけど、なんか姿勢や動きが不安定だなあ」と感じる子どもが一定数いることに気が付きました。また、「運動発達の遅れはなかったけれど、年長になったら他の子はできる運動ができない」といったケースの相談を小児科の医師から受けることが増えてきました。こうした子どもに対する理学療法を手探りでやり始めてしばらくして、私は西部地域療育センターに異動になりました。そこでは、医師の宮地所長が運動の不器用さがあるケースに「短期運動療法」として理学療法を処方していました。西部地域療育センターにいた3年間で、70人以上の子どもの短期運動療法を担当しました。そしてDCD（発達性協調運動症）という診断名に出会いました。

DCD とは？

DCD（Developmental Coordination Disorder）は、協調運動の困難さを主症状とする神経発達症（発達障害）のひとつで、日本語では「発達性協調運動症／発達性協調運動障害」と表されます。

DCDの有病率は、5～11歳の約5～6%といわれ、女兒よりも男児に多いことが分かっています。また、DCDは、他の発達障害（ASD：自閉症スペクトラム障害、ADHD：注意欠陥・多動性障害、SLD：特異的学習障害）と併存しやすいことが知られています。

協調運動とは？

協調運動とは、何かの活動を行うために、同時に複数の身体部位を動かしたり、目で見た情報を正確に捉えながら運動したりする複雑な運動のことです。

運動の不器用さは、体や環境から入力された感覚情報をまとめ上げ、脳内で情報処理を行い、計画通りに運動を出力するという一連の脳によるコーディネーションがうまくいっていない状態と考えることができます。（図1）

まず協調的な運動を行うための要素について説明します。

- ①関節が動く範囲が十分ある。
- ②ボディイメージ（触れている場所や強さ、身体の部位の位置関係や動く方向、空間での頭の位置を把握する感覚）によって、自分の身体がわかる。

- ③身体の一部だけを動かす分離運動、運動

の方向のスムーズな切り替えを行う協調運動によって、体を細かくスムーズに正確に動かせる。

- ④体幹や四肢の筋力、バランスを保持する力により、身体がしっかりする。

これらの4つの身体の基本部分を使うと、基本的な運動能力（全身的な運動や手先の運動）が発揮できるようになります。また、スムーズに眼球を動かすことで、見えるものの位置関係がわかるようになります。自分の周りの環境を把握しながら、適切なタイミングで基本的な運動を組み合わせ、協調的な粗大運動と巧緻運動の遂行が可能になります。（図2）

療育センターには、様々な専門家がいます。そのうち、理学療法士（PT）は身体全体の運動、作業療法士（OT）は手先の動きについての専門家です。特に理学療法士（PT）は、「身体の基本部分」についての評価を得意とします。DCDの評価では、これらのうちどの要素が不十分または不適切であるかを評価します。

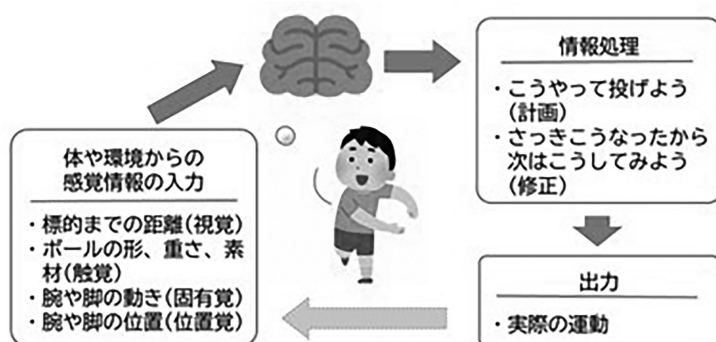
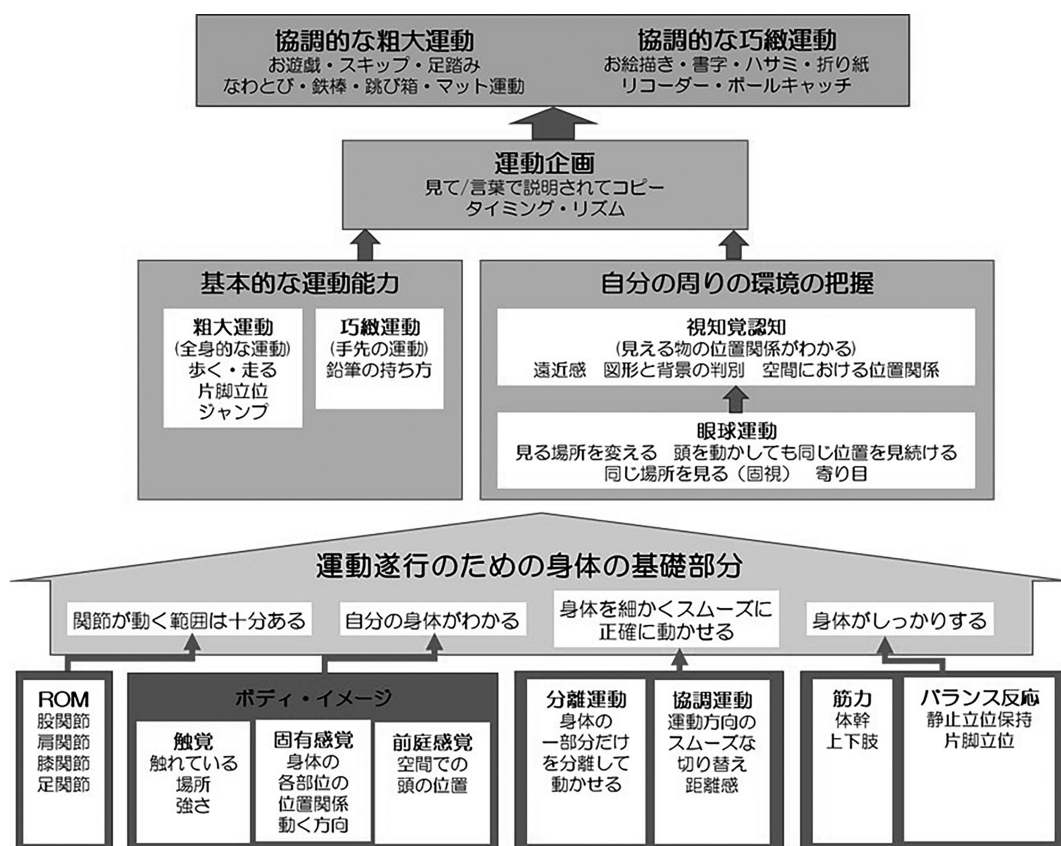


図1

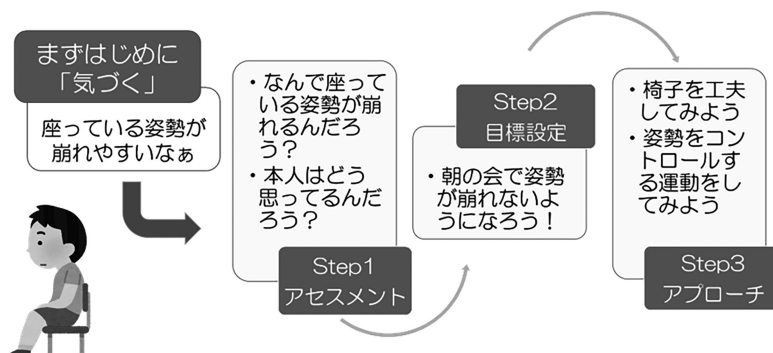


（出典：Crosslink理学療法学テキスト 小児理学療法学 藪中良彦他編 メヂカルビュー社）

支援を考える

運動の不器用さがある子どもの生活に目を向け、生活の中でアプローチしていくことが重要です。なぜなら、「運動の不器用さ自体」が問題なのではなく、「運動の不器用さによって生じる子どもと家族の生活上の困り」が問題だからです。その困りは家庭や保育所、学校などでみられることがほとんどです。子どもは一日の1/3の時間を保育所や学校で過ごすため、運動の不器用さがある子どもに対しては、保育所や学校の生活の中での支援が有効なのです。

保育所や学校での支援は、まず「気づく」ことから始まります。そして「アセスメント」、「目標設定」、「アプローチ」の順に進めます。



Step0【気づく】

5～6歳でDCDに気づくポイントは次のような点です。

- ・他の子と比べて走り方がぎこちない、あるいは不自然
- ・遊具やブロック遊びなど身体を使う遊びで、うまく身体を動かしたりスムーズに遊びをすすめたりできない
- ・長い時間座るときに疲れやすく、姿勢が崩れたり椅子からずり落ちたりする
- ・絵などを描く時に、何を描くかは思いついているのに、描く動作がスムーズでなく時間がかかる
- ・お絵描きや塗り絵の時に、何を描いたか大人に伝わらない

(出典：岩永ら (2023) DCD支援マニュアル「協調運動の障害の早期の発見と適切な支援の普及のための調査」)

Step1【アセスメント】

アセスメントは、運動の不器用さの要因を考えるために、子どもの状態や、運動の不器用さがみられる状況を分析することです。一人ひとりの子どもに適したアプローチを行うために、アセスメントはとても重要です。

「個人」—「課題」—「環境」の視点で運動の不器用さを捉える

子どもの意欲や能力（個人）だけでなく、課題や環境も運動の不器用さに関連する要因です。個人—課題—環境の相互作用によって生じていることを理解した上で運動の不器用さをアセスメントしましょう。

「個人」に関する要因：子ども自身の意欲や運動発達、様々な身体機能や認知機能など

「課題」に関する要因：緻密さ、スピード、運動の複雑性、二重課題（同時に別々のことをする）など

「環境」に関する要因：使用している道具や空間（物的環境）、理解ある支援者（人的環境）

生活上の困りを把握する

運動の不器用さによって生活上の何に困りを抱えているのかを具体的に（いつ・どこで・誰が・何に）把握するようにしましょう。

得意なことと苦手なことを把握する

苦手な運動ばかりでなく、得意な運動を把握して遊びやアプローチに積極的に取り入れることで自己肯定感や自信を高めることに役立ちます。

運動が苦手なことは特性のひとつとして捉える

運動の不器用さは子どもの特性のひとつであって、なくなるものではありません。それと上手く付き合いながら楽しく生活できるように、課題や環境を整えることも必要です。

子どもの気持ちを把握する

目標設定をする上でも、子ども自身ができるようにになりたい思いを把握することは重要です。

運動以外の側面も捉える

DCDの症状や原因を考える上では、様々な感覚に対する過敏や鈍麻などの感覚特性、感覚から得た情報をもとに状況を認識したり記憶を行ったりする能力である認知機能、知的能力、他の神経発達症の程度などを把握しておく、子どもの特性をより理解することができます。

Step2【目標設定】

アセスメントで捉えた子どもの特性をもとに目標を考えます。

目標は子どもと一緒に決める

運動学習や運動コントロールには、認知機能を働かせることがポイントです。子ども自身が目標設定や計画、修正などを「考える」ことが大切です。

家族の気持ちを取り入れる

子どもの生活をよく知っている家族の視点は大事です。子どもの運動の不器用さによって、家族が感じている生活上の不便さや困りも把握して目標を考えます。

Step3【アプローチ】

アセスメントと目標設定ができれば、実際にアプローチを行います。

「楽しい」「できた」を実感する

アプローチの際は、運動の不器用さがあっても「楽しい」「できた」を実感してもらうことが基本です。子ども自身が楽しさや達成感を感じるためには、アプローチする側が課題と環境を工夫することが必要です。

スモールステップ

できない運動を繰り返し練習させるのではなく、できる運動を通して徐々に次のステップに段階づけていくことが重要です。DCDのある子どもたちにとっては、失敗から学ぶことは苦痛でしかありません。

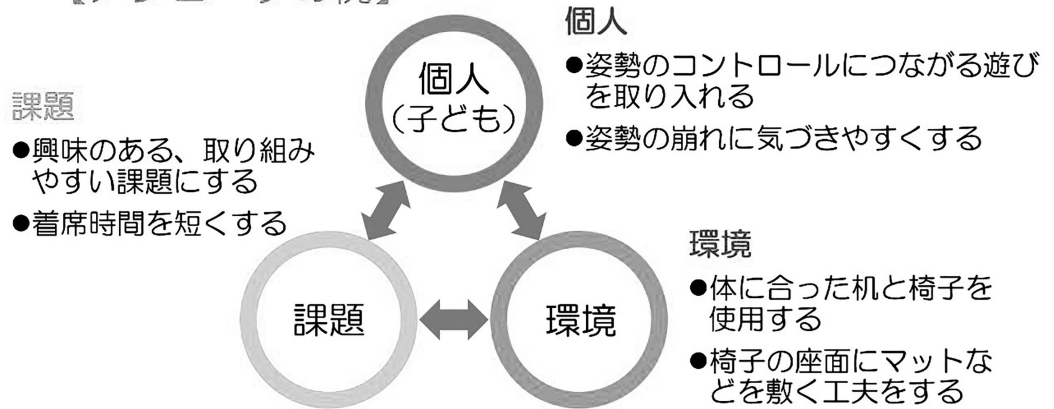
作戦タイム

子どもの認知機能を上手く活用することで効果が高まる場合があります。「なぜうまくいかないのか」「どうすればうまくできるようになるのか」を、子ども自身や支援者と一緒に作戦タイムで考えたりしながら動作の練習をすると、動作の意識づけや運動学習を促しやすくなります。



保育所や学校での支援

【アプローチの例】



柔軟なルール変更

運動の不器用さがある子どもたちにとっては、遊びのルール自体が難しすぎることもあるので、不器用さがある子どもでも楽しめるように、柔軟にルールを変更するという工夫ができます。

環境を整える

運動の不器用さには「環境」が大きく影響します。運動スキルを遂行しやすい環境を整えるために、使用する道具を工夫することもポイントです（例：当たっても痛くないように鉄棒にタオルを巻く）。一人ひとりの子どもが「やってみようかな」と思うことができる工夫が大切です。

家族を巻き込む

アプローチの大きな目的は、子どもの生活がよりよい状態になることです。子どもの生活を十分に把握している家族がアプローチに関わることは必要不可欠です。家庭でもサポートしてもらえるよう働きかける必要があります。

最後に

DCDの診断がついていなくても、運動が苦手だったり、姿勢が崩れやすかったりする子どもがいます。そんな子ども達に身近な先生たちが「気づいて」「支援して」あげてください。方法が分からない時には専門職に相談してください。様々な職種が協力することで、子ども達が楽しく取り組める工夫や支援が広がることを願っています。

引用文献：運動の不器用さがある子どもへのアプローチ 作業療法士が考えるDCD（発達性協調運動症）

東恩納拓也著 クリエイツかもがわ

◇ 中央療育センターは何をするところ？

福祉型児童発達支援センター（旧難聴幼児通園施設）すぎのこ学園は、難聴、つまりきこえに障がいのある、就学前のお子さん（0歳児～5歳児）が対象の通園施設です。地域の幼稚園や保育所等に通いながら、親子で利用します。

すぎのこ学園編

新生児聴覚スクリーニング検査が広がり、早くからきこえの問題に対応できるようになりました。聴覚という音やことばを受け取る部分に障がいがあると、きこえにくいことでコミュニケーションがうまくいかなかったり、ことばの獲得が困難になったりします。

難聴があることがわかると、赤ちゃんの時から補聴器をつけて、音をきく練習をします。場合によって人工内耳の手術を行います。人工内耳は、耳の近くにつけたマイクで拾った音を電気刺激に変換し、内耳蝸牛に挿入した電極で直接聴神経を刺激して、聴覚を生じさせます。

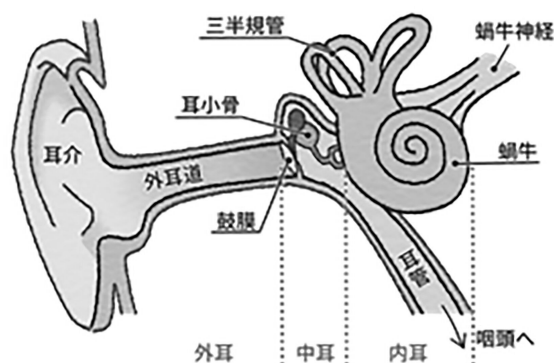
補聴器・人工内耳は、どちらもきこえを補うものですが、正常な聴力できく状態とは違うので、練習が必要になります。脳が学習して音を区別することができるようになるそうです。また、音がする・しないだけではなく、音がもつ意味を学習していく必要もあります。例えば、電子レンジの“チン”という音は“できましたよ”



補聴器



人工内耳



耳の構造

というお知らせです。私たちは救急車の“ピーポー”という音から、“病気の人やけがをした人のために急いでいます。道を開けてください。”というメッセージを受け取っています。

すぎのこ学園では言語聴覚士や保育士、児童指導員と一緒に、生活の中でことばの土台になる経験を繰り返し、積み重ねていきます。季節行事や文化の体験も大切な学びとなります。

お子さんと楽しくコミュニケーションが取れるように、その子にどのような関わり方が合っているか、わかりやすい表現はどんなものかななどを保護者の方と一緒に考えていきます。お子さんが保護者の方とともに安心できる環境で楽しむことが、もっとやりとりしたい、みんなと一緒にやりたいという気持ちを育てます。

学園のクラス編成は年齢別で、保育所等と同じ数え方です。その年の4月1日時点の年齢が

クラス年齢になります。3歳児までは生活の中でことばを習得する手助けをします。主な活動時間は午前で、給食後に降園です。集団で過ごす日は、1歳児が週2回、2・3歳児は週3回です。クラスの前か後に、週に1回の個別訓練があります。

4、5歳児は地域での集団生活に重きをおきながら、就学後の学習を見据えた土台作りをします。週2回の活動です。午後のクラスで過ごす日が1回、個別訓練の日が1回です。

生活と訓練の中で、音に意味があること、ものには名前があることを身につけていきます。そしてルールや感情のような、世の中には目に見えないけれど確かにあるものを理解していきます。

1週間のスケジュール（令和6年度版）

	月	火	水	木	金
午前		3歳児 2歳児	3歳児 2歳児 1歳児		3歳児 2歳児 1歳児
午後	5歳児			4歳児	

スケジュール表



ここからはすずのこ学園での日々の取組みを紹介します。

教室は外の音が邪魔にならないよう防音扉になっています。教室にはエレクトーンがあり、鳩時計が時間を報せます。

登園したらみんなで体操をして、それぞれの

すずのこ学園の日課（例）	
午前クラス（～3歳児）	
9:30	個別訓練 登園
10:30	体操 朝のうた 名前しらべ・日にちしらべ
	うた お話 課題 おわりのうた
11:45	給食
	降園
13:00	個別訓練
午後クラス（4・5歳児）	
14:15	登園
	はじまりのうた 出席しらべ・日にちしらべ 絵日記 うた お話 課題 おわりのうた
15:30	降園

日課表

教室に入ります。クラスの状況に合わせた課題が設定され、また季節に合わせた題材が取り入れられています。

名前しらべ/出席しらべ

まずは自分の「マーク」を覚えます。言葉で言えなくても、文字が読めなくても、自分の目印として保育所等でも使われていますね。



名前しらべ

最初は先生が掲げるマークを見て、自分のマークを認識してもらうところからです。2歳児になると、お友達のマークも認識できるようになってきます。「誰？」と聞かれたら、その子を指さして教えてくれます。

だんだんマークという手がかりがなくても、一人ひとりに「名前」があることや、“〇〇組に所属していること”もわかってきます。4、5歳児クラスでは名前の文字のカードを使い、お友達が出席しているかどうかを調べます。今日

は欠席で、目の前にいないからといって、お友達がなくなったわけではありません。「ここにいないけれど、別のところにいるよ」と気づいてもらうために、お休みの理由を考えることをしています。

日にちしらべ、今日という日

「今日」という目に見えない概念を私たちがどうやって身につけたのか、説明することは難しいですね。



ひにちしらべ

日めくりカレンダーの「昨日」をめくって「今日」を示し、「昨日」が終わったよと確認するところから一日が始まります。すぎのこ学園の日めくりカレンダーには曜日のマークがついています。

例えば、3歳児クラスでは、まず日めくりカレンダーで今日の日にちの数字と今日の曜日（マーク）を確認します。「今日のお天気」も確認します。次に、ホワイトボードに示された「○がつ○にち○ようび」の空欄を埋めるよう、数字と曜日のカードを選びます。そして、日めくりカレンダーの数字と曜日と、みんなが選んだカードと、出席シールを貼るノートの日にちが、同じであることを確認します。この「今日」という日は明日になると終わって、また次の「今日」がやってくることを積み重ね、月日

が流れるという感覚を意識させようとしています。

課題

3歳児までは主にうた、制作、リズム遊びなどに取り組みます。4、5歳児は読みや書き言葉を中心に、家庭学習で絵日記に取り組みます。

ある日のすぎのこ学園

（1歳児クラス：いちご組の様子）

「朝のうた」のあとは名前しらべ。先生がマークの絵カード（マグネットがついています）を見せます。ジェスチャーと音声で何の絵か伝え、みんなもジェスチャーや音声で応えます。名前を呼ばれたら自分のマークをホワイトボードに貼ります。名前を呼ばれる前に返事をしてしまったたり、カードを貼りに行こうとしてしまったりましたが、先生に促されて返事ができました。お休みの子のマークも一つずつ調べて、今日はいないことを確認しました。

うたの時間は、歌詞が書かれた大きな紙をホワイトボードに貼ります。だんだんお手伝いに参加する子が増えて、最後はみんなで運びました。先生のエレクトーンに合わせて、動作を交えて歌います。途中、鳩時計が11時を報せると、先生が鳩時計の“ポッポー”に注目させて、聞くよう促します。その後、11時30分を報せる音になると、気づいて教えてくれる子がいました。

親子あそびは、うたに合わせてのふれあい遊びです。この日は“ぞうきん”のうたで、みんなはぞうきんになって、縫われたり、絞られたり、畳まれたりして、最後は抱っこ。「もう一回」とリクエストが出ました。



水分補給やトイレの休憩を挟んで、大型絵本タイム。繰り返しのフレーズで体を動かします。これも「もう一回」と楽しみました。

次はシーツぶらんこです。キャラクター柄の布が出てきました。初めての活動で、みんなよく見ています。お手本でぬいぐるみが布の上に寝転びました。布の端を持って二人の先生が持ちあげ、うたに合わせて揺らします。最後は親役の先生がぎゅーっとぬいぐるみを受け止めてくれました。早速揺られるのを楽しむ子、自分がやるのはドキドキしてしまうけど、お友達がやるのを見るのは楽しい子、それぞれのペースで過ごしました。ことばではまだ難しくても、首を振って意思表示ができます。乗るのはまだいやだけど、揺らす係をやってみるととても楽しくなって、乗ってとお友達を誘う子もいました。

おしまいのあいさつだ、と思うとさっと給食の準備に取りかかる子もいましたが、今日の出席シールを貼って、「おわりのうた」を歌って、今日の活動はおしまい。給食を食べて帰ります。

すぎのこ学園のなつまつり

令和6年8月30日、なつまつりが行われるということで、見学させてもらいました！

いつもの教室にたくさんのゲームコーナーが用意されています。すぎのこ学園を卒園した小学生のおねえさんたちが、お手伝いに来てくれていました。みんなが続々とプレイルームに登園してきます。甚平や浴衣、お気に入りの洋服を着ている子、先生たちの青い法被が気になる子。いつもと違う雰囲気には驚いたのか、廊下を曲がると後ずさりする子や、お母さんの後ろに隠れている子もいました。今日はきょうだいの参加もたくさん。



先生が大きな和太鼓を叩いて合図、なつまつりが始まりました！大きな音が体に響きました。

わなげ、ヨーヨーつり、太鼓にフोटスポット、おかしすくい。好きな順番で回っていき、カードにシールを集めます。廊下には空いた時間に楽しめるよう、シールあそびのコーナーがあります。最初は隠れていた子もいつの間にかおみやげを手にしていて、得意げな様子ですれ違いました。



わなげコーナーでは、待ちきれずに景品を覗いてしまう子も。並んで順番を待つように促されていました。順番を待つことや、「ちょうだい・どうぞ」のやりとりを経験するのも大切な活動のひとつです。



おかしすくいはボウルに入った個包装のおかしをお玉ですくいます。ゼリーは好きかなと用

意されたそうですが、軽いものの方がたくさんお玉にのせられることに気づいて、重いゼリーは残されてしまいました（おまけで入れてもらえました）。

写真コーナーでは、素敵な背景の前に立って、顔はめパネルの要領で、飾られたフラフープを自分で持って写真を撮ってもらいます。

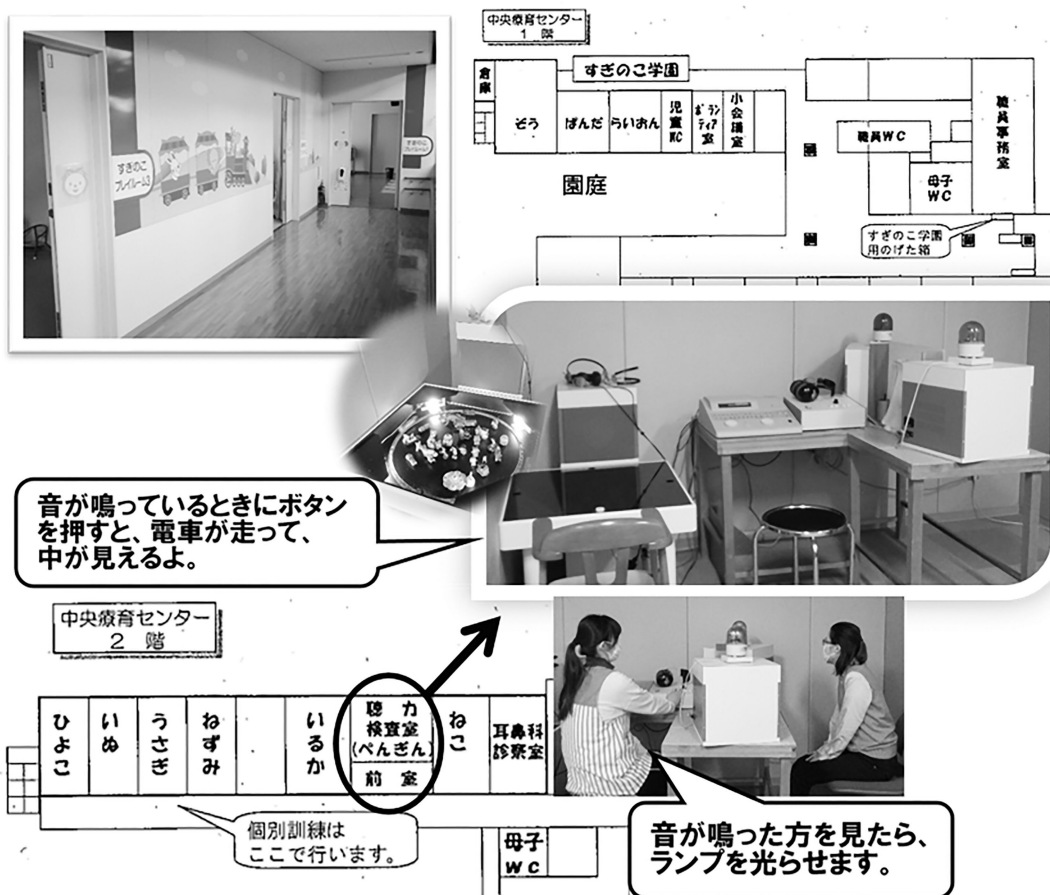
太鼓エリアには、最初に先生が叩いた太鼓が移動。慎重な子もばちを持ってそっと皮のせて、叩いてもらった振動を感じていました。

シールが全部そろったら、風車がもらえました。息を吹きかけて回したり、手で回してみたり、腕を前後左右に動かしてみたり。みんな思い思いに楽しみました。

最後はみんな揃って、歌付き大型絵本を見ました。いつもの「おわりのうた」のあとは給食タイム。食べ終わった人から降園となりました。



このような日常の積み重ねと非日常的な行事体験が、イメージの広がりやことばの獲得のきっかけとなっていきます。



ボランティア体験談

中央療育センターで活躍していただいているボランティアさんの感想です

ボランティアの参加を通してお子さんを理解する方法や関わり方等を学ぶことができます。

またみどり学園のお子さんは元気いっぱい、私も元気をもらっています。

これからもボランティアでたくさんのお子さんに関われたらいいなあと思います。

Aさん

ボランティアをさせていただいた回数こそ少なかったですが、子ども達が元気に活動する姿に出会うことができ、その笑顔に癒されました。

子ども達は日々違う姿を見せてくれるため、「今日はどんな姿に出会えるかな」とワクワクしながらかわることができ、毎回楽しかったです。

私がお手伝いできることは少ないですが、また機会があればボランティアをさせていただきたいと思っています。

Bさん

Many thanks for your help.

*** ボランティア募集中 ***

中央療育センターでは保育活動をサポートしていただけるボランティアを募集しています。

①みどり学園（児童発達支援センター）

【問い合わせ先】

052-757-6131

◎保育活動の補助

（月・火・木・金 10時～15時）

室内の活動や園外への散歩など一緒に活動します。

◎運動会や夏まつりなど行事のお手伝い

②療育グループ（親子で通う少人数の教室）

【問い合わせ先】

052-757-6126

◎きょうだいの見守り

（午前クラス・午後クラス）

短期間、短時間でもかまいません。資格は不要です。お気軽に上記までお問い合わせ下さい。



最寄駅

鶴舞線：川名駅1番出口 徒歩12分

市バス：宮裏 徒歩3分

栄17号系統（栄⇄名古屋大学）

八事12号系統（千種駅前⇄島田一ツ山）

名古屋市中央療育センターだより 第2号

発行日 2025年2月

編集・発行 名古屋市中央療育センター

〒466-0858 名古屋市昭和区折戸町4-16

Tel. (052) 757-6126 Fax. (052) 757-6129

※この機関紙は再生紙を使用しています